

## 【りゅうこ】

「おかげさんで、【がじら】はきえたが、またへんなやつが、にわにはいつてきた」  
ぼくは、顔をしかめていいました。

「金ちゃんの家庭は、怪獣に人気があるんですね」

懐爺は、呑気な声でいいました。

「すがたは、りゅうで、かおは、とらなんじゃ」

「それなら、【りゅうこ（龍虎）】ですね」

懐爺は、遠くを見る目でいいました。

むかし、会ったことがあります。

「【りゅうこ】かい。【こりゅう】じゃないんか」

「まあ、顔が先、身体が後なら、そうなりますが、なぜか【こりゅう】ではなく【りゅうこ】ですね」

そのわけを懐爺は知ってはいそうでしたが、説明がめんどくさいのか、ぼくが聞く耳をもたないと推測したのか、喋りませんでした。

「なんか、おんなのこの、なまえみたいじゃが、【りゅうこ】は、めすなのかのう」

「【りゅうこ】に雌雄はありませんから、金ちゃんが雌と思えば雌ということで」

「あいかわらず、いいかげんじゃのう」

「ですから、好い加減」

「どっちでもええが、なんとかしてくれや」

「【りゅうこ】が、危害をあたえるわけではないでしょう」

「わしんとこの、にわにいただけで、きがいじゃ。おそろしゅうて、だれもあそびにこん」

「遊びにこられても、金ちゃんはずっとここにいますから、丁度いいのではないのでしょうか」

懐爺は、いたずらっぽく笑いました。

ぼくは癩（しゃく）にさわって、

「かいじいは、【りゅうこ】に、そでのした、もらっとるのか」

「もらっていたら、祠なんかには住みませんよ」

「それもそうじゃのう。だば、たいじしてくれるんか」

「危害をあたえない怪獣を退治するということは、宿題やってきたのに、廊下に立たされるのと同じです」

よくわからん理屈でした。

ぼくは業を煮やしました。

「だばええ。そのままにしておくぞい。して、えさは、なにをやればいいんかのう」

「【りゅうこ】は人間の肉が好物ですが、怪獣はずべからく、本質的には人間に危害をあたえるものではありません。人間が怪獣に危害を与えるから、抵抗するだけなんですよ。あるいは人間が逃げまくるから、本能的に追い掛けるだけなんです」

「もったいぶるでない」  
ぼくが怒鳴ると、懐爺は首をすくめて、  
「小川で、泥鰌（どじょう）でもとって、あげたらどうでしょうか」  
「どじょうすくい、すかん」  
「なら、中川で、鰻（うなぎ）でも釣ったらどうでしょう」  
「うなぎは、ぜいたくじゃのう。うなぎじゃのうて、うさぎはどうかのう。なかやまなら、うさぎとれるぞい」  
「兔を餌にするというのは、残酷ですね。それでは、わたしが美味しいものを用意しましょう」  
「また、はなくそじゃ、あんめえな」  
「いえいえ、塩分たっぷり、大好物の兔の糞ですよ。これなら【りゅうこ】も大喜び」  
「ほんまかのう。だば、もらっていくかのう」

というわけで、兔の糞をもらって帰りました。  
「【りゅうこ】ちゃん。おいしいえさを、あげませ」  
ぼくは兔の糞を与えました。  
【りゅうこ】はそれを片っ端から食い尽くすと、腹をかかえて唸りました。  
「それほど、うまいかのう」  
「なにいうのさ。悶え苦しんどるのよ」  
「けんど、だいこうぶつの、うさぎのふんじゃぞい」  
「それはまずいよ。わたしゃ、溶けちまうよ」  
「なめくじじゃあるまいし」  
「わたしゃ、蛞蝓より塩分に弱いよ」  
「それはわかったのう。うらむなら、かいじいをうらめ」  
みるみる【りゅうこ】は溶けはじめ、五分と経たずに溶けてなくなってしまいました。  
庭には、小さな水たまりができていました。